

昭和58年2月1日 第3種郵便物認可  
平成18年4月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第37巻第4号



俳句雑誌[おき]

4月号

沖 発行所

# お水送り

能村 研三

## 能登羽咋の句碑

早いもので、登四郎が亡くなった今年の五月で五年になる。父は亡くなる一年前の平成十二年五月、能登の和倉に建てた「春潮の遠鳴る能登を母郷とす」の句碑開眼に合わせて行われた「沖創刊三十周年記念大会」に出席のために能登を訪れた。父はこの旅が最後になると思っていたようだ。全国から集まってくれた多くの弟子たちに送られ和倉を後にして、小松空港までの帰路に、父の希望もあつて能登羽咋の折口信夫、春洋父子の墓に詣でた。その時の感想を「老鶯が鳴き小判草が一面に咲きそれが浜風にゆれていて、いい処に建つたものだ」と感心した。」と「沖」の随想の中で述べている。この最後の旅が、実は俳句の旅として最初に訪れた地でもあつた。昭和二十九年、登四郎は第一句集『咀嚼音』の後記を書いた翌日、北陸の旅に出かけている。それは、父や祖父が育つた金沢や能登を一度自分の目で確かめたかったことと、その二年前に亡くなった敬愛する折口信夫の墓へ詣でることにあつた。

達 陀 の 勢 ひ 夏<sup>かつ</sup> 夏<sup>かつ</sup> 春 の 闇

春 愁 は 達 陀 松 明 浴 び て よ り

大 護 摩 の 煙 霧 く す ぶ り 春 北 斗

護 摩 焚 いて 火 ふ ぶ き あ が る 春 の 闇

句集『咀嚼音』昭和二十九年

御墓辺に晩夏の潮声なぞす

遠弟子に空蟬ひとつ天ふらす

潮も水ちかく暗けり気多の海

瑞垣を出でし火の列水送り

瀬響きに火の列うねる送水会

深闇や水を送るに火の加勢

雪間より奈良に通じる水の道

小浜、山川登美子歌碑

春はやて朱の筆跡の登美子歌碑

雛の日の茶屋「酔月」の箱階段

句集『羽化』平成十二年  
青き能登師の地祖父の地わが名の地  
小判草さゆらぎ折口父子の墓  
能登卯波終と思ひし旅得了へて

私もまだ俳句をしていない学生の時に、羽咋から日本海側の松林を走る一両電車に乗って気多大社や折口父子の墓にも行ったことがあり、その後も能登を訪ねるときは必ず立ち寄るようにしてきた。

句碑に刻んだ句「月明に我立つ他は篝草」は、この旅のあと平成十二年の九月号の「俳句研究」に発表した最晩年の心境を表した句でもある。

今回、「口能登の名刹「正覚院」」に建つ句碑は沖同人会より贈られた感謝の意を基に、私と姉の発意で建立を計画した。

なお、この句は本人の揮毫が無かったため、書家で篆刻家の那須大

能村 研三



# 春ならひ 林 翔

きなえさん

書棚を整理していたら、一番隅に原稿用紙を綴じて「相馬黄枝集」と題した物が有った。勿論自分の筆跡で、「馬酔木」の先輩相馬黄枝が同人に推された昭和16年以降24年までの作品を私の好みで選出したものである。今でこそ句集出版ブームで、無名俳人まで句集を出しているが、曾ては、優れた俳人でありながら句集も出さずに世を去った人も多く、黄枝もその一人であった。

私が黄枝ファンであることを、師秋櫻子はどうして感知されたのだろうか、バーネット夫人の代表作たる『小公子』に語呂合わせをして、私に「小黄枝」という綽名を付けられたのだった。

黄枝は奈良に住んでいて、東京の句会に出る回数は少なかったから、私のような黄枝ファンは別として、よく知らない人もけっこう居た。或る時の句会で、披講者が黄枝を女性

伏す草よ起きよ明日は春ぞ立つ

まつさらな春よ立春の午前四時

立てむとし襟無き服や春北風

ひとの句を誹る易しさ春寒く

早梅とならむ蓄も雪の中

ほんのすこし空を狭めて梅蓄

初音待つ枝ぶりよけれ園の梅

魁けの春に窓あけ丘の家

なんとまあ物置のかげ蔭の臺

昼月か夕月かとも春の月

と間違えて「相馬キナエ選」と読み上げ、爆笑を買ったこともある。

以後、秋櫻子は黄枝に「キナエさん」という綽名を付けたのだが、八王子の水原邸で新人達の句会があった時、私がやや遅目に到着したら、秋櫻子が「あ、キナエさんが来た。」と言い、私までキナエさんにされてしまった。

私撰『相馬黄枝集』から抽く。  
夕蛙をしへられたる道あらず  
苺食うべ誰かれのうへ言ひ別る  
灯のとどく雪に降る音ありにけり  
緑蔭のかの石いつもひとと在り  
紀元節小さくなりし国たふと  
夜の秋よ音といふ音われとあり

林  
翔



# 蒼茫集



いのちの芽

大畑善昭

埋火

辻直美

雪がふかくて地団駄の雪女  
雪の山越え法衣に菰とスコップと  
峡ふかく肩寄する家雪轍  
大雪の底の底なるいのちの芽  
酷く長き冬にてありき木も家も  
残る雪切株に日がとるとと

孀恋の地に張りついてはうれん草  
埋火や髪に差し込む指の先  
ひしほ味噌うららかに載る握飯  
建国の日や再生紙象牙いろ  
雛の夜の耳ついてゐるスープ皿  
雨のたび日のたび露のたう太る

肺活量

秋葉雅治

わが子を

辻美奈子

最<sup>も</sup>上<sup>が</sup>川<sup>み</sup>いま雪解の水嵩茂吉の忌  
競<sup>ひ</sup>合<sup>ふ</sup>肺活量としやぼん玉  
街道<sup>没後十年</sup>のおぼろ濃し司馬遼太郎  
高嶺はや春の位に即く曙光かな  
去る雁と行同じうし五能線  
木の芽張る川面は暁の雲泛べ

鶴引くやIMAGINE讚美歌のごとく  
スケートに刃たたかひはときに美し  
いたりあの空硬からむ春の雨  
幼子の身の丈に春待つところ  
乳離れの子に春月の抱き重り  
はるかより野火はわが子を舐めにくる

平行線 北川英子

桜木の雨後の紅潮合格す  
白鳥を見送りし夜のざんざ降り  
春障子閉ざしまさかの悼み文  
逃水や平行線に倦みしころ  
北麓祝神奈川支部の湧水育ち芹青む  
紅椿二十を綴り輪冠

ひたすらに 千田百里

春興や吊橋の揺れあやつりて  
にほどりは自在に鴨は陣固め  
啓蟄やをとこに髪を結はれぬて  
雪降り久女忌なればひたすらに  
涅槃図に釈迦より小さく象の哭く  
囀や果実酒の封切らうかと

細心の舌 金子孝子

立春や夜明けの音の海よりす  
グラタンに細心の舌余寒なほ

梅二月遺稿に初心促さる  
菜の花のつぼみ胃の腑にぼと点る  
人声に心温もる玉椿  
北風の名残りをサザンビーチまで

潮騒 松本圭司

潮騒が不意に紋白蝶となる  
サザン通りの野良猫といふ麗ら顔  
円周率となへるやうに霰降る  
マジックテープはがれる音に春立てり  
亀鳴くや亀の本字はもう書けず  
能登半島は吠える怪獣寒波去る

春潮に乗る 望月晴美

寒波くるらし雑巾の堅しぼり  
避けがたき過労死なりと聞く寒さ  
夜廻りをする雪だるま通りかな  
追儼豆夫なき闇へ強く打つ  
声帯も楽器のひとつ春舞台  
小半日春潮に乗る船の旅

# 潮鳴集



空 気 坂 ようこ

気泡だく古代の硝子冬あたたか  
冴つる夜の修正液に文字白み  
一語づつことばたまはり冬泉  
夕弥撒にありひざかけの中の膝  
綿虫とおなじ空気を吸うて眠し

尊 べり 谷口みちる

初漁やしろがねの水脈長く曳き  
釣糸を放りて寒の空を截る  
寒鰯をこんがり年金尊べり  
春泥の靴にも応へ自動ドア  
立春大吉靴墨のよくのびる

地の起伏 林 昭太郎

啓蟄や脚立の探る地の起伏  
踊り場で変はる軸足鳥雲に  
凍蝶の瞬いてから点く記憶  
無愛想で通せる家の梅真白  
春雪や握り鋏に熱籠もり

遠 心 力 曾 根 久 順

春の鳶遠心力を傾げつつ  
風呼んでどつとふくらむ杉花粉  
稚児ややく来る春満月の遥かより  
さよならのひと言つらき鳥曇  
蛇口より水挽ぎ取つて春一番

# 沖作品



# 能村研三選

うるふ秒てふ夢のつなぎ目初明り

千葉

大沢美智子

野水仙荒磯はがねの日を返し

レグホンに穢の微かなり雪催

神事待たずに山焼の一逸れ火

木枯や縞馬は縞寄せ合つて

霜柱育てて夜の舌下錠

掘割の冬日分けゆく棹さばき

臘梅の細工のひかり放ちけり

流木に波たたみ寄る余寒かな

日脚伸ぶ真中に仕切りあるベンチ

郷土誌に炭礦の一章山眠る

雪降り身ぬちに燠のごときもの

霏々と雪坂東太郎海に入る

癌切ると墨痕淋漓たる賀状

古九谷の緑いや増す春の雪

神奈川

堀口 希望

東京

菊地 光子

霜柱踏んで光りぬイヤリング

千葉

佐々木よし子

潮風の道木蓮の冬芽たつ

石筍のひそかに育つ去年今年

飛石を持ちあぐ勢ひ霜柱

臘梅の匂ふ向かうにひかる海

風花や糸に頼れる赤牛の首

白鳥の頸のみよごれぬたりけり

浅春や象の親子になみだ染み

四温晴渚に降ろす車椅子

真向ひに筑波嶺据えて春田打つ

寒牡丹目ざめの雪に緋を濃くす

凍滝やわが骨密度どのくらゐ

浮遊する言霊に積む夜の雪

一齟齬のありて別るる春立つ日

凍返る龍角散の銀の缶

埼玉

服部 早苗

東京

石川 笙児

# 沖作品 15句選評

\*

能村研三

木枯や縞馬は縞寄せ合つて

大沢美智子

縞馬というと、アフリカのサバンナなどの大平原に群れを作っている姿が目につかぶが、いつもライオンの標的にされるせいか、何か普通の馬よりやさしく弱い感じがさえ受ける。この句は動物園で出会った縞馬であろうか。アフリカなど熱帯地方で暮らす縞馬にとっては、日本の冬の寒さは堪えるだろう。縞馬のあのストライプは、却って目立ついでたちで天敵のライオンやチーターから狙われやすいようにも思うが、あれが保護色の役割を果たしているそう。よく観察してみると白地に黒のゼブラ模様、寒さに耐えながら縞が寄せ合っているようにも見た。二句一章の句としても感覚のすばらしい句である。

霜柱育てて夜の舌下錠

菊地 光子

菊地さんは、いつも類想感のない独特の句作りをされる方が、この句も霜柱から舌下錠にどのような思考回路で発展したのかわからず、発想の飛躍に感心させられた。舌下錠は普通の錠剤のように飲み込んだり噛み砕かないで、舌の下から歯ぐきと頬の間に自然に溶かして口腔の粘膜から吸収させる薬の呑み

方で、一般的には狭心症の人がいつも緊急用に持ち歩いているニトログリセリンが有名である。心臓の悪い人はちよつとした気候の変化でも、発作がおきやすいが、まして霜柱が立つような凍てついた夜は舌下錠を手放すことは出来ない。地中に育つてくる霜柱と持病である心臓の発作の翳りが微妙なところで結びついている。

癌切ると墨痕淋漓たる賀状

堀口 希望

昔是不治の病とされてきた癌は、最新の医学の発達により切除することで治癒できる可能性も多くなってきた。従つて、医師は患者に直接癌の宣告をする場合もあると聞いているが、この句の賀状をくれた人も自分の病が癌であることを知らされた上で、手術の覚悟を決めた。墨痕淋漓とは、水滴をしたらせ墨の跡が鮮やかな様子を言うが、癌に立ち向かう時の気の弱さを克服するための勢いとしての賀状を受け取ったのであろう。きつと手術は成功したに違いない。

石筍のひそかに育つ去年今年

佐々木よし子

鍾乳洞にある石筍、その育ち方は途方に暮れるほどの天文学的な年月を経てつくりあがるものだそう。鍾乳洞は雨水が炭酸ガスを溶かし込み、弱酸性の地下水となつて石灰岩を長い年月の間に溶解してできたものである。天井から垂れ下がっているものや床から伸びているものが少しずつ溶けていく様子を直接目にするには、膨大な時間がかかるとを思うと改めて自然の力の大きさに驚かされる。ちなみに一般的には年に0.01〜0.03cmの速度で育つというから気が遠くなる話である。作者は、新たな年を迎えるにあたり自然の偉大さを認識し、あくせく過ごす人間の生き方というものを改めて見つめなおしたのだ。

(以下略)